

医学部における全学共通教育の現状と課題

医学部副学部長（教務担当）

おさき よねあつ
尾崎 米厚

1. 医学部における全学共通教育の概要

近年では、医療人養成において患者中心の医療を提供するために全人的医療・看護を目指すことが求められ、人文科学や社会科学に関する学びを通して人間そのものを深く理解することは、より一層の重要性を増しており、全学共通科目の重要性も増していると言える。医学部には、3学科（医学科、保健学科、生命科学科）があり、それぞれの学生は全学共通科目を履修している。医学科は6年間一貫して米子キャンパスで学んでいるため、2008（平成20）年度より米子での履修となり、保健学科と生命科学科は、1年生は、本学（湖山）キャンパスで履修し、2年生は米子キャンパスで履修している。全学共通科目は、入門科目、教養科目、外国語科目、健康スポーツ科目に分かれており、必修科目と選択科目がある。教養科目には、生命倫理学、心理学、保健医療概論、社会福祉、保健統計学のように医学の専門科目に近い内容のものもある。湖山キャンパスでの全学共通科目の多くは湖山キャンパスの教員に担当いただいているが、一部は米子キャンパスの教員が担当している。医学科の全学共通科目では、米子キャンパスに湖山キャンパスの教員や外来講師に来ていただき対面で実施している講義も多い。新型コロナウイルス感染症の流行によりオンライン講義（リアルタイム、オンデマンド）への対応をいただき、遠隔受講できる幅が広がったのは米子キャンパスで受講する者にとっては有難いことであるが、湖山キャンパスで行われる対面講義には、医学部以外の学部の学生と合同で受ける講義もあるので、学部を超えた学生間の交流のきっかけになるという意義もあると考えられる。

卒業までに修得すべき単位に占める全学共通科目の修得単位の割合は、医学科20%、保健学科看護学専攻26%、保健学科検査技術科学専攻28%、生命科学科29%であり、全学共通科目の占める割合は高く、これらの履修が充実したものになることが求められる。医学科では、「基礎手話言語」（1年前期必修）、「早期体験・ボランティア」（1年前期必修）、「ヒューマンコミュニケーションⅠ」（1年前期必修）、「ヒューマンコミュニケーションⅡ」（2年後期必修）といったコミュニケーションと体験を重視した学生が主体的に参加できる講義演習を行っており、対外的にも鳥取大学医学部医学科の教育の特徴として評価されている。

2. 医学部における全学共通科目の実態

2022（令和4）年度の全学共通科目の履修案内によると、医学科の修得単位数は、39.5単位以上で、入門科目4.5単位（1年前期）、教養科目26単位以上（1年前期13単位、後期4

単位、2年前期4単位、後期5単位、3年前期2単位の中から)、外国語科目8単位以上(1年前期2単位、後期2単位、2年前期1単位、後期1単位、3年前期1単位、後期1単位)、健康スポーツ科目1単位(1年前期)である。医学科は1年前期から一部の専門科目が開始される。保健学科看護学専攻では、1年から4年まで各学年で全学共通科目を履修することが可能であることが特徴である。修得単位数は34単位以上であり、入門科目5単位(1年前期)、教養科目18単位以上(1年前期13単位、後期13単位、2年前期2単位、後期3単位、4年後期1単位の中から)、外国語科目は10単位以上(1年前期3単位、後期3単位、2年前期1単位、後期1単位、3年前期1単位、後期1単位)、健康スポーツ科目1単位(1年前期)である。看護学専攻では、1年次のうちから専門科目に関する講義や実習もある。保健学科検査技術科学専攻では、修得単位数は38単位以上で、入門科目は5単位(1年前期)、教養科目は22単位以上(1年前期16単位、後期22単位、2年前期2単位、後期7単位、3年後期1単位の中から)、外国語科目10単位以上(1年前期3単位、後期3単位、2年前期1単位、後期1単位、3年前期1単位、後期1単位)、健康スポーツ科目1単位(1年前期または後期)である。生命科学科は、修得単位数が多いのが特徴で1・2年合計の修得単位数は、41単位以上であり、入門科目は1年生前後に5単位、教養科目は合計25単位以上(1年前期12単位、後期14単位、2年前期2単位、後期5単位の中から)、外国語科目は10単位以上(1年前期に3単位、後期に3単位、2年前期に2単位、後期2単位)、健康スポーツ科目は1単位(1年前期または後期)である。生命科学科は、1年次でも一部専門科目がある。

3. 全学共通教育の評価

全学共通科目には、鳥取大学の基本理念「知と実践の融合」に基づく教育の目標を達成するために、学部横断的に必要とされる知識や態度を身に付け、専門教育に入る前の準備をする意義がある。すなわち、「その時代に必要な現代的教養と人間力を根底におく教育により、地域社会の課題解決や国際社会の理解を志向し、社会の中核となり得る教養豊かな人材の育成」につながる教育内容を提供することになっている。「文化、社会、自然に関する幅広い知識」、「論理的な課題探求と解決力」、「創造性に富む思考力」等といった「現代的教養」や、「自律性にもとづく実行力」、「多様な環境下での協働力」、「高い倫理観と市民としての社会性」といった「人間力」を身に付けるための教育であるため、それが達成できているかどうかの評価も重要である。教養や人間力を客観的に評価するのは難しく、さらに何年か後になって身についたことを評価することはさらに困難である。しかし、重要な事であるので、評価方法の開発も求められるところである。

2008年度より鳥取地区・米子地区に二元化された全学共通科目の教育水準の質的な一元性を保証するために、教育の実態を把握する必要があり、医学部学生を対象とした全学共通科目調査が実施されている。調査は医学部全学科対象に、前期と後期に実施されている。調査内容は調査対象となった授業科目を履修する学生に対するアンケート調査と医学部学務課を通して集められた各学科数名の学生への面接ヒアリング調査である。

学生アンケート調査の結果を見ると、2021年度前期調査では、22科目、医学科1・2年

生、保健学科・生命科学科 2 年生への調査が実施された。「授業の内容や水準が充実しているか」の問いに対しては、ほとんどの調査科目で肯定的な回答（その通りだ、または、どちらかというとその通りだ）であった。科目により回答に差が認められ、ほとんどすべての回答が、その通りだと回答している科目から、多くがどちらかというその通りだと回答している科目もあり、一部の科目は否定的意見（どちらかというその通りではない、そうではない）の割合が他の科目と比べて高い科目もあった。「教員の説明、手法は分かりやすいか」という質問や「あなたはこの授業に真剣に取り組んでいるか」「あなたはこの授業に全体として満足しているか」の質問に対しての回答も同様の傾向が認められた。科目別にみた肯定的な回答の多寡の傾向は、どの質問でも同様であった。学科ごとにみた分析でも同様のばらつきが認められた。生命科学科と保健学科の 2 年生に行われた科目に関する調査では、米子地区での講義と鳥取地区で実施された関連科目とのつながりのスムーズさも尋ねており、ここでも科目ごとに差が認められた。接続性についての課題は、1 年生に対する科目の調査結果よりも否定的な回答の割合が高いことでわかり、受講人数を分けて複数の教員で行う科目（総合英語Ⅰ）で教員間の格差が認められることも課題である。この回の調査では、「基礎生物学」、「基礎物理学」、「基礎化学」、「基礎数学」の科目に対して、2019 年度（2020 年度は調査未実施）に満足度が低い傾向があることが指摘されていたが、「基礎生物学」、「基礎物理学」、「基礎数学」では満足度の向上が見られたと報告されている。アンケート調査の自由記載に、医学に関係ない科目での課題の負担が大きいことを訴えている記述があるが（グループ課題での特定の人への負担増）、科目の意義が伝わっていない可能性があり、良き医療人となるためにも全学共通科目は重要であることを随所で訴える必要がある。学生が科目に期待する要素には格差があり、楽しい授業が良いとする人から、深い学び、新しい分野を知る事、医療と異なる分野を歓迎する人まで様々である。文化人類学等特定の科目を求める声もあった。

2021 年度後期調査では、20 科目が調査され、医学科 1・2 年生、保健学科・生命科学科 2 年生に対して調査された。「授業の内容や水準が充実しているか」の問いに対しては、ほとんどの調査科目で肯定的な回答であった。一部には「どちらかというその通りではない」、の割合が他の科目と比べて高い科目もあった。科目間格差は前期調査の科目間の格差よりは小さかった。「教員の説明、手法は分かりやすいか」という質問や「あなたはこの授業に真剣に取り組んでいるか」「あなたはこの授業に全体として満足しているか」の質問に対しての回答も同様の傾向が認められた。科目別にみた肯定的な回答の多寡の傾向は、どの質問でも同様であった。学科ごとにみた分析でも同様のばらつきが認められた。生命科学科と保健学科の 2 年生に行われた科目に関する調査では、米子地区での講義と鳥取地区で実施された関連科目とのつながりのスムーズさについても科目ごとに差が認められた。この質問では、他の質問比べて否定的な回答の割合が高い傾向が認められた。「総合英語Ⅱ」に関しては、クラス間で回答の分布に差がみられた。学生へのヒアリング結果では、複数クラスに分かれる科目においてクラス間の格差の是正を求める意見、一部の科目で配布資料に改善の余地がある点が指摘された。アンケート調査の自由記載では、オンライン講義の充実が求められていた。遠隔授業についての技術的問題点は改善の余地があるようである。

2022年度前期調査では、19科目に対して調査され（医学科1・2・3年、保健学科・生命科学科2年）、「授業の内容や水準が充実しているか」の問いに対しては、ほとんどの調査科目で肯定的な回答であった。科目により差は認められ、ほとんどすべての回答が、「その通りだ」と回答している科目から、多くが「どちらかというとその通りだ」と回答している科目もあり、一部の科目は「どちらかというそうではない」、の割合が他の科目と比べて高い科目もあった。「教員の説明、手法は分かりやすいか」という質問や「あなたはこの授業に真剣に取り組んでいるか」「あなたはこの授業に全体として満足しているか」の質問に対しての回答も同様の傾向が認められた。科目別にみた肯定的な回答の多寡の傾向は、どの質問でも同様であった。学科ごとにみた分析でも同様のばらつきが認められた。

生命科学科と保健学科の2年生に行われた科目に関する調査では、米子地区での講義と鳥取地区で実施された関連科目とのつながりのスムーズさでは科目ごとに差が認められた。1年生に対する科目の調査結果よりも否定的な回答の割合が高いという接続性の課題と、受講人数を分けて複数の教員で行う科目（「医学英語Ⅰ」）で教員間の格差が認められるという課題がある。授業の内容と水準の充実度、説明・手法の分かりやすさ、学生の取り組み態度、授業全体の評価に回答傾向は、同様であったが、つながりのスムーズさに関する否定的回答の割合が最も高いのは、毎回観察される結果であった。気をつけなければならないのは、授業内容が難しいために学生アンケートの評価は低くても、専門教育への接続のために重要性が高く、意義のある科目もあることである。学生アンケート調査には自由記載で個別の科目についてのコメントもあった。「早期体験・ボランティア」に対しては、現場に出かける実習を有意義とする意見が多く、もっと実習時間を増やしてほしい、病院での実習をしたいとの声もあった。「ヒューマンコミュニケーションⅠ」に対しては、学生間のディスカッション・交流、オンラインと対面のハイブリッド対応、講義内容（患者との対話方法、多彩な外来講師等）などの良い点が指摘されていた。全学共通科目全体への意見としては、科目の選択肢の増加（オンライン対応による選択肢増加も含め）、講義方法の改善（配布資料、オンライン授業の方法、音声など）、クラス間の授業の質の均一化、等が指摘された。

学生へのヒアリング調査の結果では、前向きな姿勢に基づく授業改善への意見が聞かれた。学生間の相互演習のある授業への肯定的評価のほかに今後の改善に対して重要な指摘も散見された。たとえば、物理学や生物学のように教養基礎科目と基幹科目（自然）の両方で行われている関連講義間の接続が悪い問題、関連する講義間の内容の重複の問題、学年が進むにつれ英語力の発展が実感できない、等であった。担当教員の一部にも意見をいただいており、学生によりモチベーションや授業に求める内容に差があること、リモート授業の対応へのとまどい、教員間で授業構成に差があること、学生間で行う演習の手ごたえ等が寄せられた。

4. 全学共通教育の課題

良き医療者になるためには、その前に良き人間になる必要がある。その意味でも鳥取大学の理念に基づく教養と人間力のある学生づくりに寄与する全学共通科目はとても重要で

ある。一方、医学科や保健学科の教育では、教育の標準化の波がやってきている。国際的な医学教育、看護教育の標準化（グローバルスタンダードへの対応）が推進され、教育の分野別質保証の基準が示され、定期的にすべての医療系大学の教育が全国的組織により評価・認証されるなかで、どの大学も条件に合致した講義・実習の内容と分量が求められている。医学科、看護学専攻、検査技術科学専攻の講義内容も世界的趨勢を踏まえたモデルコアカリキュラムが提案（不定期に改訂）され、それに合致するように指導されるようになってきた。講義の構成、各科目、各講義で教えるべき内容がかなり細かく指定されている。各大学の独自性を出す余地は残されているが、まずは国際標準やモデルコアカリキュラムに合わせる事が重視されがちである。グローバルスタンダードは、学生が診療やケアに参加する臨床実習を重視しており、その分量（実習期間）を増やすことが求められている。したがって、基礎医学・看護学的な講義・実習がより低い学年に圧縮される傾向にあり、全学共通科目のような大学生の基礎的教養を高めるような講義・演習が軽視されがちである。国家試験の合格率も公表され比較されるので、国家試験対策も必要となってくる。このままでは、医療系の学部が医療者の専門学校化する恐れがあり、画一化された教育内容になっていくことが危惧される。個別の大学にはそれに抗うことは難しいので、限られた期間、時間のなかで、最大限の工夫をこらし、教養と人間力を高めていかなければならない。そのためには、1つ1つの科目、1回1回の講義の質を高めていく必要がある。

今回明らかになった全学共通科目全体への課題としては、科目選択肢の増加、オンライン（リアルタイム、オンデマンド）対応を含めた講義・演習方法の改善、学生参加型の講義・演習の充実、複数のクラスに分かれる場合のクラス間の教育内容・方法の均てん化、関連がある科目間の教育内容の連続・発展性の改善、科目間の学生満足度の狭小化等であろう。評判の良い講義の手法を学ぶFD講演会の継続・発展も重要であろう。

まずは、指摘された具体的な問題点を改善する取り組みを続けながら、全学共通科目の期間、構造、体系等に大きなテコ入れをする必要があるかどうかの検討を行うことが重要だと考えられる。学部や学年やキャンパスの場所を超えて、オンライン等の多彩な媒体を駆使して、フォーマルにもインフォーマルにも学生が主体的に全学共通科目で学んだことを踏まえて、深く思索し、仲間と議論し、様々な価値観や意見を理解し、受け入れた上で、自分なりの考えを熟成させ、よりよい人間に育つようになることが望まれる。そのきっかけを与えられるような講義体系になっていくことが期待される。

文献

1. 令和4年度 全学共通科目履修案内. 鳥取大学
2. 令和3年度前期 医学部学生を対象とした全学共通科目調査報告. 滝波稚子、他（2021年10月）
3. 令和3年度後期 医学部学生を対象とした全学共通科目調査報告. 滝波稚子、他（2022年3月）
4. 令和4年度前期 医学部学生を対象とした全学共通科目調査報告. 重松恵梨、他（2022年9月）